

ともに、前へ ころひとつに  
がんばろう日本 がんばろう仙台



鼎談では、東日本大震災での対応の実例を挙げながら、防災について意見が交わされた

奥山恵美子仙台市長を迎えて、「ともに、前へ ころひとつに～がんばろう日本 がんばろう仙台～」が平成24年11月17日に総合福祉センターで開催され、東日本大震災から得た多くの教訓を今後の防災・減災対策に生かしていこうと、心を一つにしました。



奥山市長に総社市子ども議会の議員が、仙台市を行政視察で訪れた際のお礼を述べた。また、被災地での勉強を生かし、「総社市防災週間」の制定を提言した

東日本大震災で両親を亡くした宮城県内の震災孤児を支援している「そうじゃ・宮城っ子基金」。この支援を縁に奥山恵美子仙台市長を迎え、昨年の11月17日、総合福祉センターで「ともに、前へ ころひとつに」が「そうじゃ・宮城っ子基金」を支援している「そうじゃ・宮城っ子基金」。この支援を縁に奥山恵美子仙台市長を迎え、昨年の11月17日、総合福祉センターで「ともに、前へ ころひとつに」を開催しました。約300人の参加者は、東日本大震災で被災した仙台からのメッセージを受け、復興支援の継続や自らの防災・減災対策のあり方を考える機会としました。

これまでに総社市では、「そうじゃ・宮城っ子基金」で79人の震災孤児を支援。片岡市長は、「79人の子どもたちを自分たちの子どもだと思い、育て、守ってほしい」と話し、図書カードのクリスマスプレゼントを奥山市長に手渡ししました。奥山市長は、「長年にわたって支援を続けると言ってくれたのは総社市だけ。心を寄せていただき大変ありがたい」と感謝を述べた。

◆防災週間の制定を提言

子ども議員に任命されていた総社市内4中学校の2・3年生17人は昨年7月、宮城県内の被災地を行政視察。現地で学んだ経験に基づき、「総社市防災週間」の制定を提言しました。提言の内容は、台風や水害が起こりやすいシーズンの前の5月に、避難訓練や炊き出し、防災用品の啓発活動

◆自分を自分で守る

「東日本大震災からみた今後の防災のかたち」をテーマに、奥山仙台市長、菅波茂AMDAGグループ代表、片岡市長の3人が意見交換を行いました。奥山市長は震災直後の経験を踏まえ、「大規模な災害で市民

いつでもどこで被災するかわからない  
日ごろからの備えが大切

奥山恵美子



奥山恵美子仙台市長が「仙台からのメッセージ」と題し、東日本大震災における仙台市の被害状況や復興への道のり、「そうじゃ・宮城っ子基金」の支援を受ける子どもたちの様子などを講演。「震災の記憶を忘れないでほしい」と話した

◆日ごろから連携を  
奥山市長は、震災対応での反省も込め、「行政は決定に時間を要し、時期を失うことがある。それに比べて国際的なNGOはスピード感と財政規模があると



AMDAGグループ菅波茂代表



奥山恵美子 仙台市長



片岡聡一 総社市長

が困っている時ほど役所は来ない。水と食料を持って避難所へ」と提唱。菅波代表は、「災害時には行政が機能しないケースがある。実際に避難所を運営する自治会の人たちを準職員とし、臨時的に権限を与える制度をつくるべき」と主張しました。また、片岡市長は、「行政に頼るだけでなく、自分たちを自分たちで守るという防災意識が必要」と話しました。

感じた」と。片岡市長は、「総社市はAMDAGとの密接な関係があったからこそ、迅速な支援ができた。日ごろからNPOやNGOと顔見知りの関係を築いておくことが重要だ」と述べた。

ました。また最後に、奥山市長に対し、「総社市が被災したときは助けてください」と支援協力を依頼。奥山市長は「もちろんです。全力で支援します」とお互いの連携を約束しました。

奥山仙台市長からのお礼の手紙

皆さま  
このたびは、宮城の震災孤児たちに  
寄せる熱いお気持ちと励ましの「気」  
を感じながらの得がたい1日でした。  
一夜にして両親を失ったことは、大  
きな悲劇ですが、それでもたくさんの  
人たちが、こうして遠くから応援の心  
を寄せ、励ましのエールを送ってくだ  
さっていることは、いつか彼ら、彼女  
らが大きくなった時に、人生を肯定的  
に受け止めるよすがとなるものと思  
います。心から御礼申し上げます。

仙台市長 奥山恵美子  
※一部抜粋